75

もっと知りたい 武者小路実篤

かんとうだいしんさい
関東大震災から100年

震災の、その先へ

河野と一緒に、9月1日の地震の後に焼けてしまった実家を見に行ったんだ。家は完全に焼けていた。子どもの頃に木登りをして遊んだ大きな五葉松も、楓の木も、カラスが巣を作った槙の木も完全に姿を消していたな。

武者小路氏邸宅焼跡

九月十三日描
氏と同行して旧宅を訪ねたり

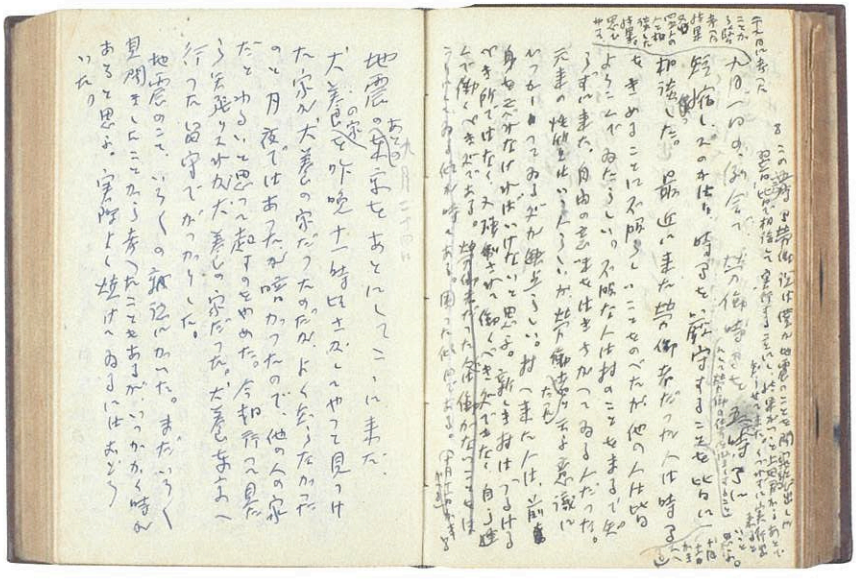
河野通勢が震災の後に持ち歩いたスケッチブック　1923（大正12）年9月　紙・鉛筆

武者さんが生まれ育った家を見に行って、絵に描きました。フミ石や手洗い鉢、玄関の石段など燃えにくいものは残っていましたが、家はありませんでした。近くの学校からでた火がどんどん広がって、この辺りを焼いたそうです。

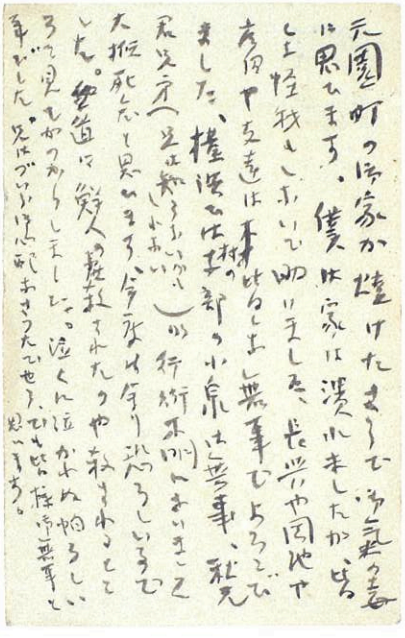
震災が起きる前から日記をつけていたのだけど、9月は1日と24日しかつけていないな。いろいろなことがあって、書こうという気持ちになれなかったんだ。

友人で詩人の千家元麿がお見舞いの手紙をくれたんだ。友人たちが皆、無事でなによりだったよ。

元園町の御家が焼けたそうで御気の毒に思います。僕は家は潰れましたが、皆んな怪我もしないで助りました、長與や園池や高田や友達は皆んな無事でよろこびました・・・



武者小路実篤「気まぐれ日記」原本　1923（大正12）年9月1日（右ページ）・24日（左ページ）



千家元麿より実篤あての手紙　9月23日

九月十九日　東京にて

自分は大震災の時日向にいたので何にも知らなかった。だから地震や火事の恐ろしさをまのあたり知ることは出来なかった。しかし来てからいろいろのことを聞くにつけて、随分恐ろしい出来事だったと思った・・・しかし皆過ぎてしまったことである・・・生き残った者は生きのこったよろこびを味わって、生きてゆこうと努力するより仕方がない。

武者小路実篤「雑感」
（『改造』一九二三年十月号 より）

十月十八日　東京にて

今度の地震や火事で食えなくなったものがどの位いあるだろう。
其処からこそ
何か生れて来なければならない。
それはなんだ
・・・
人々がすなおに生きられる世界、
それがくるよう、
用意はいいか、
用意は。

武者小路実篤「用意はいいか」
（詩話会編『災禍の上に』一九二三年・新潮社 より）

発行日／令和5年7月22日　企画・発行／一般財団法人 調布市武者小路実篤記念館　〒182-0003 東京都調布市若葉町1-8-30　TEL.03-3326-0648
デザイン・レイアウト／今井三樹男　　イラスト／矢口由美子　　印刷／半七写真印刷工業株式会社